

## 『解体新書』の扉絵のアダム、イブ像の淵源

澤井 直

順天堂大学医史学研究室

『解体新書』の扉絵には裸体で向き合う男女の全身像が描かれ、アダムとイブの表象と考えられてきた。男性が手にする果実は蛇にそそのかされて食べてしまった果実として描かれることの多かったリンゴであり、また杉田玄白が開いた塾の名である「天真楼」の下には頭蓋骨を取り巻く蛇が描かれており、旧約聖書の原罪と楽園追放の場면을構成する要素が揃っている。

この『解体新書』の扉絵が、クルムス (Johann Adam Kulmus) の解剖書のオランダ語訳 (『ターヘル・アナトミア』) にはなく、16世紀スペインの解剖学者ヴァルヴェルデ (Juan Valverde de Amusco 「ワルエルダ」とも記される) の解剖学書の扉絵と類似した図案であることは従来から知られており、近年は『解体新書』の一連の図の制作した小田野直武が参照したヴァルヴェルデ解剖学書の版の同定が試みられている。

解剖学書にアダムとイブの像が描かれたのはヴァルヴェルデが最初なのだろうか。ヴァルヴェルデの解剖学書は、多くの図案がヴェサリウス (Andreas Vesalius) の『ファブリカ』に類似していたことから、ヴェサリウスからの派生あるいは盗用とみなされることが多い。本発表では、ヴァルヴェルデの解剖学書を起点に、アダムとイブの像の由来の探求を試みる。

まず、ヴァルヴェルデの解剖学書は1556年にスペイン語版、1559年にイタリア語版で、全身の各器官系の解説、銅板図、図のキャプションからなる書籍として出版された。この書籍は好評を博し、それにアントワープの出版業者プランタン (Christophe Plantin) が目をつけ、1566年にラテン語版が出版された。以後も各国語版が出版され、版を重ねた。

アダムとイブの表象が現れるのは1566年のラテン語版の扉絵が最初である。この版はスペイン語版・イタリア語版の内容を単にラテン語に置き換えたものではなく、先行する版の内容に追加がなされている。この追加部分はヴェサリウスの『エピトメー』における6章からなる本文部分と人体外部の名称を列挙した部分だとも考えられてきたが、実際には、『エピトメー』のテキストの人体外部名称の列挙の後ろに、さらにグレヴァン (Jacques Grévin) による各器官系の簡潔な解説が加えられている。

このグレヴァンの解剖学書は1564年にラテン語で出版されているが、その内容は、1545年以降にトマス・ゲミヌス (Thomas Geminus) が出版して版を重ねた、ヴェサリウスの『エピトメー』のテキストと『ファブリカ』からのいくつかの図版とそのキャプションからなる解剖学書に対して、グレヴァンによる解説を加えたものとなっている。

このようにヴァルヴェルデのラテン語版書籍のテキストの元をたどるとゲミヌスとグレヴァンという、同じくヴェサリウスの解剖学書に由来する書籍に行きつく。そしてゲミヌス、グレヴァンの解剖学書にはアダムとイブを示している図があった。しかもその図はヴェサリウスの図を改変したものだった。すなわち、大元にあったのは、ヴェサリウスの『エピトメー』の人体外部の名称を列挙したテキストが現れるページに描かれる男女の裸体で立ち並ぶ図だった。この図には果物は現れず、裸体図の周りに何も置かれていないのでアダムとイブと特定することはできない。他方、ゲミヌスとグレヴァンの解剖学書は主にヴェサリウス『ファブリカ』の図を用いる一方で、『エピトメー』の男女全身裸体図も含めている。そこでは、裸体の男女が同じように描かれながらも、男性の手にリンゴを持たせ、二人の間に蛇が取り巻く頭蓋骨を配置している。リンゴ、頭蓋骨、蛇という要素は、裸体の男女がアダムとイブであることを示す、ヴァルヴェルデの扉絵における構成要素と一致する。